

異年齢保育の在り方に関する研究

— A 保育所の実態から —

原 麻美子・塩 美佐枝

Examining the education method of the mixed-age grouping for the early childhood period — The study of actual situation in Nursery 'A' —

Mamiko HARA · Misae SHIO

Abstract

The method of the mixed-age grouping (3,4,5-year-old child) has implemented nowadays for the Kindergarten, Nursery, and the certified center for early childhood education. The method has several advantages for the education to the children. However, it also has several disadvantages such as 'the difficulty to communicate of appropriate contents' towards the children due to each range of ages has different communication ability. This study showed the results of research for the actual situation in Nursery.

The research investigated one facility 'A' and took the interview to the responsible nursery teachers. The interview has implemented, focused on the advantages and the difficulties of mixed-age grouping in this Nursery. And, the research also focused on the actual usage of words by 3,4,5-year-old child, and examined the ideal way for the method of 'the mixed-age grouping'. The study showed the several findings. The acquisition of words for 3-year-old child has the gap, compared with the acquisition of words by 4,5-year-old child. These results means that the nursery teacher should take care for the children's communication the mixed-age grouping (3,4,5-year-old child). Especially, it is the matter of promise, child's play, and safety awareness, because of each age were different communication ability. In addition to that, the nursery teacher should be taking care for the communication towards the children, by consideration for each children's development of the communication's ability.

Key-words

The method of the mixed-age grouping, The acquisition of words, development,

キーワード

異年齢児保育、言葉の習得、発達

I 研究の動機・目的

3、4、5歳児それぞれ18名、合計54名の園児が同じ空間で触れ合いながら社会性を育む『異年齢児保育』に、保育士7名が協働している。大きい子は小さい子に遊びを教え、小さい子は大きい子の姿に憧れを抱き、真似をしている姿が垣間見られている。保育者は、園

児一人ひとりの個性・自主性を尊重し、受け止め、見守りながら言葉掛けのタイミングを図り、愛着関係を構築し、子どもたちの興味や発達の状況を把握して指導するように努めているが、異年齢児同士の関わりから生じるけんかの仲介に入る場面や、日常の保育において、異年齢児に対し同じ言葉を伝える場面が見られ

ている。4, 5歳児には伝わっているようだが、3歳児には思いが伝わっていないように感じる。

坪井(2018)は、九州保育団体合同研究集会の「異年齢児保育」分科会の記録(2008年～2017年)をまとめているが、その中で保育経験の浅さによる戸惑いなどが紹介されている。

保育者は、3、4、5歳児それぞれの言葉の獲得の実際を把握し、言葉かけをすることに保育へのむずかしさを感じているのではないかと考える。

また、小泉(2013)は、縦割り保育は年上の子どもが、年下の子どもを気にかけて自分以外の立場にある人の気持ちを考え行動することで自身を育み、年下の子どもは年上に助けられることで憧れや信頼感を抱き、新奇な課題に取り組む動機づけを高める場となり得ることが確認されたと述べている。

そこで、A保育所での『異年齢児保育』の利点を活かし、保育の資質・能力の向上のためにも、幼児クラス(3, 4, 5歳児)54名の子どもたちの言葉の獲得を把握し、異年齢児保育を担当している保育士7名の感じている利点や困難点から異年齢児保育の在り方を考究する。

II 研究方法

1. 子どもたちの実際調査

(1) 質問紙の作成(絵カード)

- ・動物の名前「イヌ」「ウサギ」「ネコ」「クマ」「リス」
- ・食べ物の名前「ブドウ」「タマネギ」「ナス」「モモ」「イチゴ」「スイカ」
- ・花の名前「アジサイ」「アサガオ」「サクラ」
- ・道具の名前「メガネ」「杖」「傘」「爪切り」「鍵」
- ・遊具の名前「ブランコ」「砂場」「竹馬」「花壇」
- ・動作の表現「話をしている絵」「机を拭いている絵」「写真を撮る絵」「うがいをする絵」「電話をしている絵」「ゴミを捨てる絵」
- ・マーク「非常口のマーク」「消火器のマーク」「信

号のマーク」「Pのマーク」「トイレの絵」

- ・オノマトペ「雨が降っている絵①」「雨が降っている絵②」「太陽が輝いている絵」「手が光っている絵」「うさぎが寒そうに体を震わせている絵」

(2) 絵カードによる聞き取り調査

異年齢児保育対象園児(3, 4, 5歳児)各学年18名、計54名に対し、自由遊びの時間内に実施した。一人ひとりの子どもと向き合い、1枚ずつ『絵カード』を見せて、子どもが発する言葉を丁寧に受け止め記録した。その様子を見ていた他児が、『私もやりたい』『いいな』『絵カード遊びやりたい』と、いう声が聞こえた。

『絵カード』による質問調査は、保育者と一対一の特別の時間でもあり、笑顔で傾聴している職員の表情の下で、子どもが伸び伸びと自己の発想を言葉で表現する姿がみられた。

(3) 倫理的配慮点

- ・異年齢児保育室内コーナーの一角で、通常保育と同じ慣れ親しんだ環境での実施。
- ・「園長先生がお部屋に居ると安心する。」という子どもの声を受け止め、『絵カード遊び』を園長も一緒に実施した。
- ・絵カードが多くなりすぎないようにした。
- ・人にかかる時間を短くした。
- ・データは個人が特定されないようにした。

2. 『異年齢児保育』担当保育士による質問紙調査

(1) 質問紙の作成(質問事項)

- ①異年齢児の保育の効果を箇条書きでお書きください。記憶に残る事例がありましたら、紙面裏に簡単に書いてください。
- ②異年齢の保育の難しい点を箇条書きでお書き下さい。記憶に残る事例がありましたら、紙面裏に簡単に書いてください。

③異年齢で保育する際、配慮していること。

- 1) 環境
- 2) 子どもへの配慮
- 3) 保育士間の配慮

④その他これから実施したいことなど、自由にお書きください。

(2) 質問紙によるアンケート調査

経験年数の異なる7名の異年齢児担当保育士に、よるアンケート調査を実施した。

(3) 倫理的配慮点

記入することで、自身の保育を振り返り、課題が明確化すると同時に、改めて『異年齢児保育』の効果を実感できるようにした。

また、回答は無記名とし、保育に支障が出ないようにアンケート実施の時間を確保した。

Ⅲ 3, 4, 5歳児の言葉の現状

1. 調査の内容

動物の名前」「食べ物の名前」「花の名前」「道具の名前」「遊具の名前」「動作」「マーク」について、3, 4, 5歳児の一人ひとりに絵を見せながら聞き取りを行った。

2. 調査結果の分析

(1) 動物の名前

「イヌ」「ウサギ」「ネコ」「クマ」「リス」の絵を見ての回答は、どの動物の名前も全年齢で正答率が高く、ほぼ100%であるが、3歳児で「いぬ」を「わんわん」と答えた幼児が3名いた。これは幼児語が残った状態であると考えられる。

(2) 食べ物の名前

「ブドウ」「タマネギ」「ナス」「モモ」「イチゴ」「スイカ」はどの年齢でもほぼ100%の正答であったが、「キャベツ」のみ5歳児が「レタス」との回答が3名あった。4歳児でもわからないという回答が4名であるが、3

歳児は全員が正答であり、聞き方の影響も考えられる。5歳児に「レタス」と回答した幼児がいたのは、絵が似ており、むしろレタスを知っていたための誤答ともいえる。

(3) 花の名前

3歳児は花の名前について全体的に正答率が低く、「お花」という回答である。特に「アジサイ」「アサガオ」「サクラ」の名前を知らず、サクラの正答率は29%である。

4歳児になると「アジサイ」が58%であったが、他の花の名前は正答している。

5歳児ではアジサイ、アサガオが80%で、他は100%の正答である。

(4) 道具の名前

「メガネ」「杖」「傘」「爪切り」「鍵」ではすべての年齢で「杖」の正答率が低く、3歳児は全員が分からなかった。「メガネ」「傘」は全年齢で100%の正答、「鍵」も3歳児で1名のみ誤答で4、5歳児は100%の正答である。

「爪切り」は3歳児では「つめきり」の名前が言えず、「ホッチキス」「ハサミ」「おうちにある」という回答である。しかし「つめをきる」「ここをチョコチョコキする。」「指、ちょっきん」の回答は、名前は言えないが、何に使うかは理解している回答である。「爪切り」は4歳児では正答率が50%であるが、5歳児では、88%である。

(5) 遊具の名前

「フランク」はどの年齢も100%の正答であり、「砂場」は3歳児が78%、4歳児100%、5歳児が94%で、正答率が高く、幼児にとって身近な遊具であることが分かる。

一方、「竹馬」は、3歳児の正答は0で、4歳児は17%である。しかし、5歳児になると89%と正答率が急激に上がっている。「花壇」はどの年齢でも正答が低く、「お花」の回答が多く見られた。

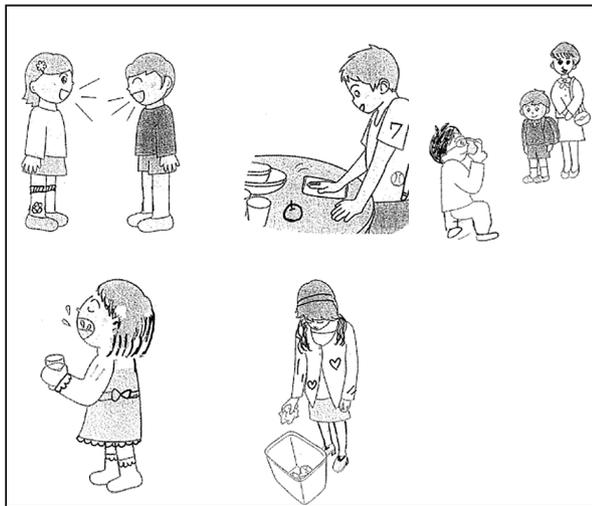
「花壇」の正答は、3歳児が6%、4歳児が17%、5歳

児が21%である。

(6) 動作の表現

<図2>のような動作の絵を見て、なにをしているのかという問いである。

<図2>



「話をしている絵」では、3歳児は話をしていることをとらえており、「おしゃべり」との回答は10名である。内容に触れ、「お帰りなさい」「おはようございます」が2名あった。4歳児も「しゃべっている」は8人で「話している」は6人である。内容に触れている回答は「おはようございます」「挨拶してる」などがあった。5歳児も同様の傾向で、「しゃべってる」が8人、「話している」が4人である。内容に触れている回答「挨拶」「おはようございます」などである。

「机を拭いている絵」では、3歳児は「ふいている」と回答しているのは12名で、「机」と言っているのは2人、テーブルが3人である。4歳児は「机を拭いている」が6人、「テーブルを拭いている」が8人である。さらに、5歳児では「テーブルを拭いている」が13人、机が2人である。全員が「拭く」という動作は把握しており、「机」は、年齢が上がるにつれて「テーブル」になっており、5歳児では机とテーブルの違いも理解していると考えられる。

「写真をとる絵」では、3歳児は「写真をとる」の解答は10人あり、「お母さんと僕」「はい チーズ」「カメ

ラで一す」「写真」などの回答があった。4歳児は「写真を撮ってる」が12人、「カメラとってる」が2人、「カメラで写真取ってる」「写真」などの回答である。

5歳児は「写真を撮っている」が12人で、「記念写真」「撮影」「入学写真」など写真の中身を説明する回答もある。「写真を撮る」はほとんどの年齢で説明できているが、5歳児では動作の他に、写真の内容にも触れている。

「うがいをする絵」では、3歳児では「ガラガラペ」が5人、「ぐちゅぐちゅ」3人、「ぶくぶくペー」1人「ごくごくペー」1人と表現している。日常、大人がうがいのことをこのように表現していることの影響であると考えられる。動作を表す言葉として「うがい」を回答した幼児は4人である。

4歳児では「うがいをしている」という回答は9名、「ガラガラ」が5人、「ぐちゅぐちゅ」が2人、その他が2人である。5歳児になると「うがいをしている」が14人で、「ガラガラ」が4人である。3歳児の表現が、5歳児では正確な表現になっているのが分かる。

「電話をしている絵」では、3歳児は「電話」が8人で、動作の説明はない。「電話してる」が8人、「電話かけてる」「もしもし」が各1人である。4、5歳児は「電話している」「電話かけてる」の回答がほとんどであるが、5歳児は「電話かけるところ」「でんわとっている」「ケータイをもどそうとしているところ」など、動作を詳しく見て説明している。

電話をかけている絵は各年齢で、ほとんど動作の説明ができており、電話は幼児に身近な物であるためと考えられる。

「ゴミを捨てる絵」では、3歳児は「ゴミ箱」6人、「ゴミ捨ててる」は9人、「ゴミポイ」「汚れてる」は各1人である。4歳児は「ゴミを捨ててる」が11人「ゴミ箱にゴミを捨てる」は5人、「ゴミ箱に捨ててる」2人である。動作の説明ができており、「何を、どこにどうしている」の説明もしている。5歳児も「ゴミを捨ててる」が13人、「ゴミをゴミ箱に捨てる」「ゴミ箱に捨てる」「捨ててる」「ゴミ捨て」と動作の説明が各1人、「ゴミ」が1人であった。4、5歳児では、ほぼ同様の回答で、

動作の説明を行っている。

(7) マーク



「非常口」のマークでは、3歳児は「逃げる道」4人、「トイレ」4人、「わからない」「その他」が10名である。4歳児では、「わからない」が7人であるが、正答も3人ある。さらに、「逃げるマーク」「消防避難口」「はしる、わたる、かけ込み、出る」は各1人で、マークの意味をとらえた説明である。5歳児は、「非常口」が5人、「逃げる」3人、「逃げ場所」2人、「避難」「出口」が各2人、「避難所」「危険」が各1人である。5歳児では、はっきり避難のマークを理解した説明の回答が多くなっている。

「消火器のマーク」では、3歳児では「火事」4人、「消防」2人、正答が1人で、9名が分からないと答えている。4歳児では、正答が4人となり、「火事」3人、「消火」1人、「消防」2人、「非常事態」1人となり、火事と結び付けた説明が行われている。一方、5歳児では、「消火器」が10人で正答率が急激に高くなっている。そのほかの回答でも「火事するとき」「消防」と関係のある説明があった。しかし「ガソリン」1人、「わからない」のも2人ある。

「信号のマーク」ほとんどが全年齢で正答であった。「Pのマーク」では、3歳児で「英語」の回答が4人、「ピー」が2人、「看板」1人、「車とめるところ」が2人で、「わからない」は8人であり、ほとんど意味が理解されていない。

4歳児では、「パーキング」が2人、「駐車場」4人「車

止めるところ」1人、「英語」1人、「ピー」1人、「分からない」8人である。マークの意味をとらえた回答が増加している。

5歳児は、「駐車場」8人、「車置くところ」「車のマーク」「ピー」「とまれ」が各1人、「ロケット弾」1人、「わからない」2人と回答している。

「トイレの絵」は、4、5歳児は全員正答である。3歳児も「寝る前にトイレしている」という回答以外、全員正答である。トイレのマークは幼児に身近なマークと言える。

(8) オノマトペ

オノマトペは、ものの音や声などをまねた擬音語（ざあざあなど）、あるいは状態などをまねた擬態語（てきぱき、きらきらなど）をさす言葉である。幼児が、どのように擬音語や擬態語を獲得しているかをみるため、次の絵を用いて、一人ずつ聞き取りを行った。

<図3>



<図3>のように雨が降っている絵で、どのように降っているかという問いについて次のように答えている。

3歳児の回答で、降り方に関する回答は「ざあざあ」2人、「ざあ」4人「いっぱい」2人、「ぼつぼつ」「ぼとぼと」1人である。その他は「めっちゃ」「ひどすぎ」は各1人、「雨」「風」という回答もあり、「回答なし」は3人である。

4歳児は、「ざあざあ」8人、「ざあ」5人、「ぼつぼつ」

3人、「ぼとぼと」1人で、ほとんど降り方に関する表現になっている。回答なしは1人である。

5歳児の回答はこの傾向が強まり、「ざあざあ」12人、「ざあー」3人、「ななめ」「びゅうびゅう」は各1人で、「わからない」は1人であった。年齢が上がるにつれて、絵が表している状態を的確にとらえて表現できるようになっている。

もう一枚の絵も雨が降っている絵である。どのように降っているかの問いに次のように答えている。

3歳児は「ぼつぼつ」3人、「ぼろ」2人、「まっすぐ」2人で、「ざあー」「ざあざあ」「ちょっぴし」「ぼと」「ぼとんぼとん」「びたびた」「あめ」「ちょっとだけ」と答えている。雨の降る様子を表現しているが、その表現はさまざまである。

4歳児は、「ぼたぼた」7人、「ぼとん」「ぼとっぼとっ」2人、「ぼたんぼたん」「ぼたぼた」「ばらばら」「びちゃびちゃ」各1人で、「まっすぐ降ってる」「わからない」1人である。いずれも雨が断続的に降っている様子を、オノマトペを使ってはいるが表現はさまざまである。

5歳児は「ぼつぼつ」が13人「ぼつぼつ」「ぼつ」が各2人、「ぼとぼと」1人で、「ぼつぼつ」のオノマトペに表現が固まってきている。

図3右上の絵は太陽が輝いている絵である。太陽がどのように光っているかという問いに対して次のように回答している。

3歳児は「ピカピカ」4人、「ピカーン」「びか」「きらきら」が各1人で、光る様子を表現している。この他に「たいよう」2人、「晴れてる」2人、「いい天気」2人、「わからないと「笑ってる」「明るい」「あたって」が各1人、「分からない」も1人いた。

4歳児は、「びかびか」4人「きらきら」2人、「きらきら」2人、「ピカーン」1人で、光る様子を表現している。そのほかは「おひさま」2人、「光ってる」3人「ふかふか」1人、「わからない」1人である。

5歳児は「びかびか」8人、「きらきら」5人、「ピカーン」2人、「びかんびかん」「おわっともえてる」が各1人で、「分からない」も1人である。

手が光っている絵については、3歳児は、「びかびか」8人、「きらきら」1人が、手が光っている様子を表現している。一方、「手」1人、「きれい」6人、「ふく」1人で絵から思いついたことを表現している。

4歳児は「びかびか」8人、「きらきら」5人、「びか」「びかんびかん」「きらきらきらーん」「びかびりん」が各1人、「ひかてる」1人で、手がきれいになった様子を表す言葉が増えている。

5歳児になると「びかびか」11人、「キラキラ」3人、「びか」「びかー」が各1人で、「びかびか」の表現が増えている。

ウサギが寒そうに体を震わせている絵では、3歳児は、「寒い」6人、「あったかい」2人、「ふるえてる」「びかびか」「人参たべてる」「まふらー」「葉っぱ集めてる」「たおるかけてる」「うさぎさん寒いとあき」が各1人で、ほとんどが絵の説明で、震えていることについての表現はない。

4歳児は、「ぶるぶる」6人、「がちがち」「ぎりぎり」は各1名で、寒い状態を表す言葉を表現している。一方、「ふるえてる」「かたい」「うさぎさん」「しゅー」は1人、「わからない」は2人である。

5歳児は「ぶるぶる」の言葉を使って表現しているのは10人で、「ひゅー」「ぶる」各1人、「震えてる」2人、「寒い」は3人、回答なしは1人である。

3. 総合考察

(1) 幼児の生活で身近な物は、言葉の獲得に年齢の差がない

イヌ、ウサギなどの動物の名前やブドウ、イチゴ、タマネギなどの野菜・果物の名前、ブランコ、傘、メガネなどは3歳児も認知しており、各年齢で正答率が高い。子どもたちが生活の中でよく目にしたり、扱ったりしている物については、認知度が高く、年齢の差が見られない。

(2) 3歳児の言葉の状況

しかし、「アジサイ」「アサガオ」「サクラ」では、3歳児は「お花」という回答が多く、個別の名前で認

知ではなく、漠然ととらえている。また、爪切り、杖、竹馬なども3歳児は正答率が低く、4歳児、5歳児との差が大きい。子どもたちの身近にないもの、生活の中であまり関係のないものは、3歳児の認知度が極端に低い。

また、動作の表現では「話をしている」「机を拭いている絵」「写真を撮る絵」は内容的には把握しているが、動作を部分的に表現することが多く、写真を撮っている絵では「お母さんと僕」「はい、チーズ」などの回答がある。聞かれていることから逸脱していると思われる、自分中心のとらえ方が見られる。動作を問う問題では、「うがいをしている絵」については、「ガラガラペ」「ぐちゅぐちゅ」「ブクブクペー」などの言葉で表現しており、「うがい」という言葉を使わず、動作による表現である。大人の言葉かけの影響が残っているものと考えられる。

特に3歳児で正答率が低いのは、「マーク」の意味把握と「状態を表現する言葉」である。「マーク」はほとんどの幼児が誤答となっており、雨の降り方を絵から読み取る問いでも、ほとんどが回答できていない。3歳児は物の名前は分かるがその他のことは自己中心的な把握が目立つ。

(3) 4、5歳児の言葉の状況

一方、4、5歳児では、調査のほとんどの問いで4歳児より5歳児の正答率が高くなっている。

4歳児では、「アジサイ」「爪切り」が約半分の幼児が正答、「竹馬」は17%の正答である。これらは3歳児ではほぼ正答なしであるが、5歳児になると90%程度の正答率になってくる。しかし、動作やオノマトペの問いでは、4歳児、5歳児の正答率に大きな差はなく、3歳児との差に比べると4、5歳児は同程度の理解と考えるとよいと思われる。

以上、言葉の面からは、3歳児の状況と4歳児、5歳児はかなりの発達差がみられるので、一日のほとんどを一緒に過ごし、保育の中で学習していくためには、様々な配慮が必要であると考えられる。

IV 異年齢保育の利点と課題

1. 異年齢保育の利点

A保育園の異年齢保育を担当している保育士7名の質問調査から、以下の回答が得られた。

- ・年下の友達の面倒をみることで自信を持てるようになり、様々な事にチャレンジしてみようとする意欲に繋がっている様子が伺える。
- ・『異年齢児保育』の経験から、知らないことやまだやったことがないことをしたいと思って、真似したり教えてもらったりしながら遊びの幅を広げ、生きる力を育てている。

子どもたちは、異年齢児との関わりにおいて切磋琢磨し、けんかしたり認め合ったりしながら園生活を送り、自身の所持品の始末が途中でも、年下の友達の面倒を見る姿が見られ、どの保育者も異年齢児同士の関わりから生じる情緒の育ちを実感しているようである。家庭での生活において保護者と子どもが一緒に道を歩く時は、自然と子どもを内側へ導き安全を確保していると考えられるが、核家族化が進み、兄弟姉妹がいない子どもも、保育所という第2のお家では、異年齢児と一緒に散歩に出かけ、4歳児が3歳児を内側に誘導する姿が見られる。自身が年上の友達から大切にもらった経験から得た優しさや思い遣りの気持ちが伝承されている。

2. 異年齢保育の課題（難しさ）

質問紙では課題について次のように記述している。

- ・3歳児クラスが帰りの活動を行う時間や、外遊びから入室する際に、異年齢児が声をかけて促している姿が見られる。
- ・広い保育室内での職員の連携が難しい。
- ・年齢に合わせた言葉かけが難しい。
- ・異年齢児同士の関わりや、けんかの仲介が難しい。
- ・安全性を伝える際、異年齢児への言葉掛けが難しい。
- ・子どもの育ちを職員同士で共有する時間が足りない。
- ・担当職員との情報の共有が（伝達事項）難しい。

月案、週案、日課を基に学年毎のスケジュールを把握し、子どもたちには、絵カードで可視化しているが、天候や登園時間などの急な変更が必要な際に、7名の保育者間の伝達や意思疎通（柔軟な対応・協働）の手段を具体的に検討する必要性がある。

また、7時30分から20時30分の開所時間を、シフト制で保育を実施しているため、お迎え時に保護者へ引き渡す際、伝達事項は書面で引継ぎが出来ているが、54名の園児のエピソードを共有し、子どもたち一人ひとりの育ちを把握し合い、偏りなく保護者へ伝えるためにも、保育者間のカンファレンスの時間確保することも課題である。

教育方針・理念を一人ひとりの保育者が認識しながら『異年齢児保育』を行うにあたり、捉え方や保育観に差異が見られた。

例えば、日々の生活に合わせて室内遊び、戸外遊びの時間が学年毎に異なるが、4歳児が入室時間の際、5歳児はまだ遊んでいる。生活リズムを体得していくにあたり、異年齢児への興味・関心が強いことから学年毎の活動（タイムスケジュール）の習得に時間を要することへの困り感を抱く意見が挙がった。それとは逆に、異年齢児との関わりから生ずる興味・関心を憧れと捉えた助言や、入室後の活動に対して、「やってみよう」「早く手を洗おう」という気持ちになるような言葉をかけ、『異年齢児保育』の中での学年毎の活動や生活習慣の獲得を、自然に導く意見もあがった。

4. 考察

54名の園児が安心・安全な環境下で過ごすために、個々の成長に合わせて物的環境を整え、保育者が温かく見守る人的環境を整えるためにも、職員間の連携・カンファレンス実施の時間の確保に課題が見られる。

保育者を目指す学生が園見学に来た際、9割の学生が「1人担任」への不安感があり、「異年齢児保育」を複数の保育者で担当できることからの安心感が魅力と語っている。新任職員のみならず、保育歴20年を超える「ベテラン層」が抱える難しさの課題が明確化されたことを明日からの保育に活かしたい。

V 異年齢保育の配慮事項

1. 質問紙調査の結果

異年齢保育の配慮事項についての質問紙の記述は次の通りである。（複数回答）

(1) 環境としての配慮

- ・発達にあった遊具の用意・・・・・・・・・・5
- ・どの年齢でも使える遊具・・・・・・・・・・1
- ・年齢だけで遊ぶ場、空間の確保・・・・・・・・2
- ・動線を考えて環境を変えていく・・・・・・・・1
- ・安心、自立した生活ができる環境・・・・・・・・1
- ・いろいろな遊びができる環境・・・・・・・・1

(2) 子どもへの配慮

- ・その子の発達にあった声かけ・・・・・・・・2
- ・異年齢の子どもたちが関わりを楽しめるように、見守り、仲介する・・・・・・・・1
- ・遊び方、約束を統一する・・・・・・・・2
- ・身体的な大きさの差に留意・・・・・・・・1
- ・近くで声をかける・・・・・・・・1
- ・見守る保育と遊ぶ保育の両立・・・・・・・・1
- ・話をするときの基準・・・・・・・・1
- ・待つ時間を少なくする・・・・・・・・1
- ・その時々気持ちを大切にすること・・・・・・・・1

(3) 保育士間の配慮

- ・遊びや環境について、統一した配慮ができるように、すり合わせる・・・・・・・・1
- ・アイコンタクトをとる・・・・・・・・1
- ・午睡中に様子を伝達する・・・・・・・・1
- ・活動等について伝え合う・・・・・・・・2
- ・相談、報告、コミュニケーション・・・・・・・・1

A保育園の質問紙調査では、以上のような記載が見られたが、異年齢保育の課題では、発達の違う幼児の保育の難しさが語られており、配慮事項でも言葉のかけ方が重視されている。

2. 異年齢の発達に応じた言葉かけ

幼児の聞き取り調査では3歳児の言葉の獲得が4、5歳児と差があり、自己中心的な理解の仕方が見られた。そのため、一日の大半を3学年の幼児と一緒に生

活する異年齢保育では、保育者が幼児にかける言葉が年齢によっては理解されない場合もある。また、子ども同士の言葉のやりとりやけんかの中のやりとり、遊びのルールなどの理解も年齢によってはコミュニケーション能力に差があるため、困難な場合が予想される。一人ひとりの発達に応じた言葉かけが必要であり、伝わらない場面では、保育者が仲介していく必要がある。

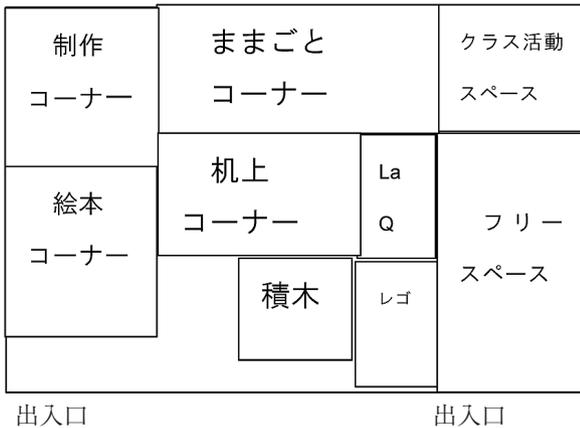
さらに、全員が集まって話を聞く、絵本を見る場合などは、どの年齢を基準にするか悩むという保育者の発言もある。3歳児に理解しやすい絵本を選べば、5歳児には物足りないなどである。話の内容についても例えば「うがいをする」という言葉が出てきた場合、3歳児は絵が伴わない場合は理解しにくく、聞き流す可能性もある。子どもの発達を詳細に把握して、活動の内容によっては年齢別の指導を考えていくなどの配慮が必要である。

3. 環境上の配慮

(1) 落ち着いた、安全な場の確保

今回の研究では言葉の実態を中心にしているが、保育士対象の質問紙には、環境上の配慮も聞いている。3、4、5歳児では身体的な発達が大きく異なり、関わり方によっては危険が生じる可能性もある。保育室内の各年齢の拠点となる場所は安全で、落ち着いて安心感がもてることが重要で、他の年齢の子どもたちの動きの動線を予測して、配置していく必要がある。

A園の幼児クラスの部屋のイラスト



A園は、図のように絵本棚や遊具棚で仕切って場の

構成を行っている。仕切りの棚は低いいため、幼児でも部屋の奥まで見通すことができるし、声も聞こえてくる状態である。実際に保育観察を行った際、衝立でコーナーを区切り、11時ごろから5歳児だけが集まって教師が絵本を読んでいた。他の年齢の子どもたちは好きな遊びをしており、話声や物音が聞こえている。子どもたちは絵本に見入っていたが、時々振り返ってみる子どもおり、落ち着いた雰囲気を持することが難しい。保育者が熱心に話かけ、子どもたちを集中させていた。

(2) 発達にふさわしい遊具

幼児は年齢によって身体的発達、知的発達が著しく異なることから、年齢にふさわしい遊具の準備、使い方の指導が適切に行われる必要がある。

遊具については、幼児は自分なりに使える方法で遊びに使っていく姿もあるが、保育のねらいに応じて、必要な経験が得られるよう、考えていく必要がある。経験することが期待される内容は、年齢によっても異なることから、その活動が室内での活動の場合は、環境の設定等は各年齢に応じたものになる。豊かな経験ができるよう、必要に応じて環境を変えたり、再構成したり、遊び方のアイデアを提供したりしていくことが重要である。

(3) 異年齢の子どもたちが遊べる環境

一方、年齢の違う子どもたちが学び合うことも重要で、異年齢保育のねらい、意義がそこにあると言っても過言ではない。

様々な年齢の子どもたちが一緒に遊びながら体験を重ね、学んでいくために、一緒に遊べる環境、遊具も必要である。

同じ場において、同じ遊具を使って遊んでいる中で、遊び方や約束事が伝播していくし、思いやったり、助け合ったりする場面も生まれる。遊具の遊び方が固定されていたり、適応年齢が著しく逸脱したりしていると、遊べる子どもの年齢の幅を狭めることになるので、可塑性の高い素材、遊具が必要である。

(4) 保育者間の連携

大きな空間の中で、年齢の異なる幼児と一緒に生活し、それぞれの発達を保証していくためには、一人ひとりの幼児の理解を深め、環境をどのように構成するか、遊びの場をどのように確保していくのか、各年齢が個別に必要な経験をどのように確保していくかを話し合い、連携を図っていくことが必要である。その日の連絡事項も大切であるが、保育観のすり合わせ、指導上の基本的な姿勢、指導計画上の具体的な手立てなど詳細な打ち合わせが必要である。

VI まとめと今後の課題

広瀬由紀、太田俊己(2010)は、異年齢保育を長年実施している千葉市の公立保育園を対象に、異年齢保育に携わる保育者の意識に関する調査研究を実施している。その中で、異年齢保育の教育的意義については重要と確認しているが、困難点も指摘している。今回の本研究でも、話をするとき、絵本の読み聞かせなどはどの年齢に合わせればよいか、子ども同士のコミュニケーションの問題、年齢に必要な経験の確保などの難しさが出ており、広瀬らの研究と同じ結果である。

本研究では、困難点の一つである発達の異なる3、4、5歳児のコミュニケーションの問題をとりあげ、特に3歳児の言葉の理解状況が4、5歳児とは大きな差があるということを再確認した。このことは年齢的に見れば当然のことともいえるが、そのことを具体的に把握し、意識して保育を行うことが重要である。

また、質問紙調査の記述にあるように、大きな空間で、間仕切りの低い部屋では物音、話声が部屋全体に広がるため、落ち着いた雰囲気づくりのための工夫、活動の場所を戸外で行うなどの細かな配慮、環境構成が必要である。

<今後の課題>

本研究は、A園の子どもたちと保育士を研究の対象にしており、今後は研究の対象を拡大して研究していく。

又、子どもたちの実態把握を言葉の獲得状況に絞っ

ているが、子ども同士の人間関係、知的発達と異年齢保育などの視点からの研究も行う必要がある。

《参考文献》

菅田貴子 「異年齢保育の教育的意義と保育者の援助に関する研究」 弘前大学教育学部紀要 (100) 2008
 坪井敏純 山口 郁 異年齢保育の中の子どもたち 九州地域科学研究所報 (21) 2005
 広瀬由紀 太田俊己 異年齢保育に携わる保育者の意識に関する調査研究—千葉市の保育者を対象にした質問紙調査に基づいて— 植草学園大学研究紀要 (2) 2010
 細谷俊子 積田 洋 青木健三 異年齢保育における保育室の空間構成と室内遊びでの異年齢交流の実態 日本建築学会計画論文集 (73) 2008
 塩美佐枝 保育内容「言葉」乳幼児期の言葉の発達と援助 ミネルヴァ書房 2020
 塩美佐枝 幼児理解と一人ひとりに応じた指導 聖徳大学出版会 2015
 横山洋子 生活と遊びから見る「10の姿」ナツメ社 2021
 坪井敏純 異年齢保育における幼児期の人間関係と指導・援助の在り方 鹿児島女子短期大学紀要第54号61-67 2018
 小泉栄美 縦割り保育で子どもたちが経験していること:異年齢間の関わりのエピソードをもとに 山梨学院短期大学紀要 第33号 49-61 2013
 カモ カモさんのイラストカード まるごとBOOK 新星出版社 2018
 田村正隆 保育の多目的イラスト&掲示ポスター ナツメ社 2019